PDF issue: 2025-11-18

近世本草書類における鱸魚について

島田, 勇雄

(Citation)

国文神戸, 創刊号:52-63

(Issue Date)

1968-06

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(URL)

https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100481937



近世本草書類における鱸魚について

島 田 勇 雄

なかった。全く迂濶な話である。

その松江市のスズキをわが国の最良の佳品とする俗説がある。ちょ の本草学者小野蘭山が、本草綱目の講義で、世にもくしき偶然の一 っとした洒落であるわい、と思っていたところ、わが近世後期最大 絶品とする。ところで、その松江をわが鳥取県の松江市に仕立て、 佳味なりと言ったという話がある。爾来鱸魚は松江のそれを最良の また烟花記に、呉都が松江の鱸魚を献上したところ、炀帝が東南の た、という故事がある。鱸魚の美味を語る話の一つになっている。 またま志を得たとて何の価値が有ろうぞ、と官を捨てて郷里に帰っ 日秋風の起こるのを見て郷里の鱸魚の鱠を想起し、人生は貴い、た 晋書の張翰伝に、翰が都城に出て志を得、顕官となったが、ある

的解説として次の事が挙げてある(若水本による) みあって、博物学的記述はない。本草綱目では巻四四の魚類 魚の意味)に鱸魚があり、その集解に中国におけるこの魚の博物学 る。証類本草の巻二一の「虫魚中品」の鱸魚の項には薬学的記述の をかなり重要視し、そのことがわが近世に深い影響を与えた点にあ 学的記述を主とするものであるのに対し、本草綱目が博物学的記述 れ以前が証類本草の時代である。この両者の相違は、証類本草が薬 わが近世の本草学は明の李時珍の本草綱目によって開眼した。 (有鱗

時珍日鱸出;;吳中;淞江尤盛四五月方出長僅数寸状微似;鱖而色

疑いがさしはさまれなかった。中国の本草書が伝来し、この魚の中 とにかく昔から今に至るまで、これをスズキと読むことにほとんど になぜそのような和訓を与えるようになったのか、よく分らない。 致なり、と感嘆しているのを見て、驚きいってしまったの。 古事記の昔以来わが国では鱸魚をスズキと訓じてきた。この魚名 右の時珍の解説によれば、 郷|芦葉前垂紅亭下不>論>銭買来玉尺如二何短|鋳||出銀梭| 直 風|更迴然南郡記云呉人献||淞江鱸鱠於隋炀帝|帝日金虀玉鱠東 是円白質黒章三四点細鱗巨口一双鮮春風已有真風味想得二秋 白有:|黒点||巨口細鱗有||四鰓||楊誠斎詩頗尽||其状||云鱸出||鱸 鱸は呉の淞江の産がすぐれており、

国における魚類学的性格が明らかにされても、なお疑うことを知ら

-- 52

問的な流れの中で、いつ、どのようにして、その異質性に留意する 更にまた時珍はそのことに注意していないが、わがスズキに該当す く®、魚類学的性格についての知見に乏しい時期にそのような解釈 みるに、体長・四鰓など若干適合しないものもあるが、類似点も多 たいのである。 に至ったか、ということに焦点をおいて、その研究史をたどってみ ように思われる。今はただ、わが近世の本草学者が、どのような学 ると思われる鱸魚も中国にあったらしいことからすれば、一層その におちいったとしても、あえてとがめだてのできにくい点もある。 いることを言うのである。ところで右の解説をわがスズキに充てて であるという。 四鰓とはえらぶたに四条の紅黄色のしわのできて もっとも四鰓のあるのは長橋の南に所出するもののみで、他は三鰓 口が大きく、鱗は小さく、えらぶたが四枚ある、ということである。 ょうど四五月頃に出る。長さは数寸、色が白く、黒い斑点があり、

朔は、父道三の「能毒」を慶長十三年に改編したさい、その前年に 上品・中品・下品は周礼の食医以来の伝統的分類法であり、彼は鱸 的記述を行なってい、更に「宜禁追加三段」中の「虫魚類」の「中 の下巻で「鱸魚」に「スゞキ」と付訓し、証類本草にもとづく薬学 作があり、そのうち宜禁本草にのみ魚類についての記述がある。そ 学者は曲直瀬道三であり、彼に能毒・本草異名記・宜禁本草の三部 始めて舶載せられた本草綱目を参看した旨をその跋文に 書 いて い 魚を中品とする証類本草の説に従順に従ったのである。道三の子玄 本草綱目輸入直前の、証類本草時代の中世的本草学を代表する医 「鱸」と載せている。「中」とは食療品としての中品の意で、

る。

٤) しかしスゝキと訓じることに疑いをはさむまでには全然到っていな 項に五例(二例は付訓なし)あってそれぞれスゝキと訓じている。 その他「日用食性」の項の「上品」の部に一例、「諸疾宜禁集」の 目録」の項の「鱸魚」に本草綱目にもとづく薬学的記述をしてい、 くを望むのはむりであろうが、寛永十九年版によれば、その「食性 いる。この書の初版は慶長十八年で、綱目輸入後六年めのこととて多 好著を吸収しようとつとめた形跡はその著「日用食性」にとどめて る。 「能毒」には綱目の影響は現れていない。しかしいち早く新渡来の この書に接し、新しい方法論をかいまみたわけであるが、

らの書は薬功のみを述べ、それも証類本草系とも本草綱目系とも定 歌能毒、編者・刊年不明、二巻)などがそれである。 巻)(山岡元隣増補、寬文七年刊、七巻)·本草和歌能毒(新編和 者・刊年不明、七巻)・和歌食物本草(編者不明、 記憶に便ならしめる書が行なわれた。本草歌(宜禁本草集要歌、 かでないが、和歌能毒は前者系であるらしい ・「すゞき」の語が載り、本草和歌能毒には魚類は載らない。これ 「鱸」・「すゞき」の語が載り、和歌食物本草(二巻本)には「鱸」 啓蒙時代によく見られるように、本草の要旨を和歌の形式にして 寛永七年刊、 本草歌には

が多く、誤訓とすべきものが多かったが、しばらくは道春の儒教的 和訓の選定にあたっては、古辞書などに通用するものをあてること て本草綱目の術語を選出し、これに和訓をほどこしたものであるが、 (慶長十七年成稿、寛永八年刊、五巻)を著わした。後者は主とし 本草綱目を始めて入手したのは林道春で、慶長十二年のことであ 道春はこれによって本草綱目序註(寛文六年刊)・新刊多識篇

禄年間刊、六巻)は、多識篇の和訓をそのまま踏襲している。考(編者不明、延宝九年刊、九巻)や本草綱目指南(編者不明、元老分類してあるが、のちこれを改編していろは順にした本草薬名備を分類してあるが、のちこれを改編していろは順にしたがって布語岐」と和訓を添えてある。多識篇は博物学的分類にしたがって布語声がの故に準拠すべき書とされた。「鱸魚」も通用のごとく「須々声

についての常識水準を示すものであったろう。 についての常識水準を示すものであったろう。 についての常識水準を示すものであったろう。 についての常識水準を示すものであったろう。

われる。

現われるようになる。

とた人であったととにもよるのである。 とれは彼が、観念論的な病理論を排して実検的な古医方を提案が、いたずらに中国書の追随に終るのをいさぎよしとせず、親視実が、いたずらに中国書の追随に終るのをいさぎよしとせず、親視実が、いたずらに中国書の追随に終るのをいさぎよしとせず、親視実が、いたずらに中国書の追随に終るのをいさぎよしとせず、親視実が、いたずらに中国書の追随に終るのをいるぎました人であったととにもよるのである。

鱸魚がわがスズキとは別物なることを正しく、認識してい

るの

る

い。彼のばあい淡水産・海産の別までは思い及んでいないように思性味とを挙げているが、その状の中に何が含まれるか明ら かで なに「寸寸幾」とし、関甫独自の主治を述べたあとで、和名鈔・多識に鱸をススキと訓じているがと、本草綱目の説を引用して、これより考えれば鱸魚はスズキではありえない、と述べ、俗間に「保天」より考えれば鱸魚はスズキではありえない、と述べ、俗間に「保天」より考えれば鱸魚はスズキではありえない、と述べ、俗間に「保天」と呼ぶものであろから、一層賞讃せざるを得ない。その見出し語は、実にお見事というほかはない。次代の学者がいつまでもまた逆は、実にお見事というほかはない。次代の学者がいつまでもまた逆は、実にお見事というほかはない。次代の学者がいつまでもまた逆

どり、 物本草の資料によれば、中国本草書に載る魚類五十種のうち疑いな 項は模倣すべきものを持たないため、 どと、いずれも関甫より一歩後退の感がある。ただ附録の和産魚の 中心の選出法、ほとんど中国本草書の転載に終止する薬学的解説な きもの四十二種を選出したとある。批判的ではあっても中国本草書 家食物摘要大全、天和三年刊、八巻)と食物本草(食物本草大成、 中で新井玄圭やのちの野必大のごとき著者の現われたことは注目す にするなど独自のものが出ている。「鱸魚」は通説のごとくススキ 元禄七年刊、八巻)とがあるが、両者同版の由である。手もとの食 べきである。新井玄圭は武門より杏林に転じた人で、食物摘要(諸 江戸はまだ医学的水準が高くはなかったようである。 であるし、ある意味では、 本草綱目にもとづく薬学的記述をあげている。 江戸の学的水準を示すものでもあ かえって博物学的記述を中心 そのような

巻)は、加賀侯前田綱紀の委嘱によって成ったもので、博物学的記備用庖厨和名本草(向井元升、寛文十二年成稿、貞享元年刊、十三

くするが、そのような傾向は早くも現われつつあったのである。中心となるのであるが、若水は物産学・名物学の色彩をひときわ濃中心となるのであるが、若水は物産学・名物学の色彩をひときわ濃がは肥前の人であるが、壮年以後は京都に住み医を業とした。京あることに想到すれば、大きく前進した好著というべきであろう。あることに想到すれば、大きく前進した好著というべきであろう。

を関本草の構成は、鱗類・無鱗類の二分類法、魚名の配列順などなったのではないにしても、このような結論を導くに至ったのである。。 ただその解説は、綱目が従来の薬準めたものであった。 鱸魚については、本朝先輩が長さ数寸といたのに対し、これは博物学的記述を中心にするという点で綱目を一たのに対し、これは博物学的記述を中心にするという点で綱目を一たのに対し、これは博物学的記述を中心にするという点で綱目を一たのに対し、これは博物学的記述を中心にするという点で綱目を一たのに対し、これは博物学的記述を中心にするという点で綱目を一たのに対し、これは博物学の見た鱸魚については、本朝先輩が長さ数寸といるとし、筑後柳川の入江の海ざかいにいる、そのことが、単純に通説にスズキの類で、時珍の見た鱸魚についる。そのことが、単純に通説に次水産と海産との差違を軽視している。そのことが、単純に通説になったのではないにしても、このような結論を導くに至ったのであばったのではないにしても、このような結論を導くに至ったのである。

定すると自序にも述べている。魚類の分類も鱗類・無鱗類の二分類とは祭酒林直民、泉州岸和田侯岡部長泰、兄竹洞が序文を認めている。同じく江戸の人でも、新井玄圭に比すれば、所説は遙かに前進る。同じく江戸の人でも、新井玄圭に比すれば、所説は遙かに前進る。同じく江戸の人でも、新井玄圭に比すれば、所説は遙かに前進る。ことを避け、実検実証を経て確信の持ちうるもののみに記述を限ることを避け、実検実証を経済を開発している。魚類の分類も鱗類・無鱗類の二分類と限されば、所説は遙かにはいることを避け、実検実証を関する。

論した従来の行き方に対する反省が見られる。 点である。邦産にして、漢産に類似点があれば、安易にそれよと決点である。邦産にして、漢産に類似点があれば、安易にそれよと決なのは、華和異同の項を設けて、本邦産と中華産との異同を論じるに加えて、河湖・江海の二分類をあげ、四分類法を取る。更に重要

þ 鱸魚についての解説は必ずしも単純にスズキ説を容認するものでは 第四冊は舜水説の聞書きによる分類体辞書をなしているが、それの のであろうが、舜水説を正しく伝え聞いたものか疑わしい。という する。兄竹洞との関係から舜水説を聞き、もって自説の傍証とした るのみか、「明流寓舜水朱氏亦見」鮬為二松江之鱸 味亦同 鰓也」とすることを始め、観察に粗雑さがめだつ。 更に気味・主治・発明の項で薬学的記述を行なう。「本州鱸魚亦四 とする。これはこの魚の成長名の初出である®。 のは舜水には舜水朱子談綺(宝永五年刊、三巻四冊)があり、その る説話を載せる。ここで始めて雲州松江のスズキのことが載る®。 項、産地による良否、古事記・平家物語・東鑑に載るスズキにまつわ 鱸については、「訓ニ須須木」」と割注し、釈名に「小者日レ 鮬 」 スススキト 時珍の言う「松江之鱸長僅数寸是本邦之鮬也」と単純に割りき 集解に博物学的 華和異同の鱸で

ないからであるの。

いて、どれほどの認識を持っていたか一切不明に属する。ついては全く記述がないので、京都学派で争点としたことなどにつついては全く記述がないので、京都学派で争点としたことなどにつ気に诅説になずむ者よりは前向きであると言ってもよかろう。鱸ずらに通説になずむ者よりは前向きであると言ってもよかろう。鱸で最高罪は軽く、良心的であるとさえ言えるかもしれないし、いたを誤る罪は軽く、良心的であるとさえ言えるかもしれないし、いた

系列に属する啓蒙的な医薬書である。諸疾禁好物の項に「鱸」が六養食物大成、元禄十六年刊、三巻)は曲直瀬玄朔の「日用食性」の がちらちらするのである。筑前土産考(宝永六年序)にも河鱸、海 徹底的に疑えない、十分科学的になりきれないところから来る限界 がかえってあだとなったわけである。 日本のセイゴであろうと即断する。成長名等を知ったことや語源癖 日本釈名式の語源趣味をのぞかせ、本草の鱸が長さ数寸とあるのは には、長さ・味のこと、セイコは松 江 の音韻変化であろうなどと しい。鱸魚についても同様である。河鱸の項には、六七寸をセイゴ ようとの見地に立ちえている。益軒は元升の影響をかなり受けたら 中国の典籍に捕われずに、独自の見地からわが物産について記述し を開拓している。綱目の分類法・記述等について多くの批判を持ち 行してより三十七年後の著作で、すでに綱目を超越して独自の境地 六巻)等の著書がある。大和本草は、益軒が本草綱目の和刻本を刊 的用法に従うものであるし、深い検討もされていないわけである。 一尺内外をハクラ、とその成長名を挙げる。海魚の方では 近世前期最大の本草学者貝原益軒には大和本草(宝永六年刊、十 馬場幽閑の日用食性大全(日用食性和解大全・食物和解大全・保 いろは引きの部分に「寸々幾」が一例載る。書の性質上、通俗すかき 益軒の説には、まま、通説を 「鱸魚」

一〇五巻)がある。訓蒙図彙より四十七年後の著作で、古医方刊、一〇五巻)がある。訓蒙図彙より四十七年後の著作で、古医方派の著者の学問的姿勢は見事であり、多くの本草学の成果を吸収した見るべき点が多い。江海有鱗魚の部に「鱸」の項があり、「四鰓魚 和名須々木 小者名二波称 尚小者名二世伊古二」とし、解説部分に「其三四寸者称二世比古」六七寸近」尺者名二波称 尺以上至二一二尺1者名二須受岐 諸国四時共有之雲州松江最多而 夏月 特賞、之」とする。古医方の先輩、関甫の創見を生かせなかったのは残念である。成長名にハネが始めて出る。。ハネは内田氏によれば、北陸・瀬戸内・山陽に使用される。

中国の等しいものもあり、したがって諸般の記事から鱸魚はわがスズキの等しいものもあり、したがって諸般の記事から鱸魚はわがスズキの等しいものもあり、したがって諸般の記事から鱸魚はわがスズキの等しいものもあり、したがって諸般の記事から鱸魚はわがスズキの等しいものもあり、したがって諸般の記事から鱸魚はわがスズキの等しいものもあり、したがって諸般の記事から鱸魚はわがスズキの等しいものもあり、したがって諸般の記事から鱸魚はわがスズキ説もおそらとはできない。庶物類纂では松江府志等の地誌類を引用したのち、さらしく若水の見解を述べている。すなわち本草綱目には「長僅数寸」とし、そのことをめぐってわが本草学者間にいくたの論争が生じていたのであった。それで後漢書左慈伝を引用し、慈が三尺余の鱸魚を釣ったとの記事があるので、中国の鱸魚はわが双ズキ説もおそらとはできない。庶物類纂では松江府志等の地誌類を引用したのち、ことはできない。庶物類纂では松江府志等の地誌類を引用したのち、ことはできない。庶物類纂では松江府志等の地誌類を引用したのち、さいできない。庶物類纂では松江府志等の地誌類を引用したのち、ことはできない。ため、自然の一般の記事から鱸魚はわがスズキの等しいものもあり、したがって諸般の記事から鱸魚はわがスズキの等しいものもとが、これでは、大田のは、大田のいまが、大田のいまが、大田のいまが、大田のいまが、大田のいまが、大田のいまが、大田のいまが、大田のいまが、大田のいまが、大田のいまが、大田のいる。

結論は同じであっても、 姿勢をもって向う、という充実した態度を持した。近世中期にはと ような観点から主張される鱸魚スズキ説は、従前のスズキ説とは、 おける門下生その他の記述に表われるのである。したがって、この 水の学殖・見識が当時の京都学派を風靡し、その学説がこの前後に の程度にまで本草学の水準は高まりを見せていたのである。との若 に対し、彼は、たとえ時珍の記述といえども盲信せず、是々非々の ちた言辞である。従前の本草学者が時珍の記述を金科玉条としたの って、時珍の誤まりである、とする®。これは、また全く自信に満 が鱸魚の実態に通ぜず、その幼魚を見てそのように記述したのであ に当たるはずであり、本草綱目に「長僅数寸」とするのは、 次元を異にするというべきであろう。 李時珍

Ų

績を挙げているが、魚類に関して は ほ とんど師説に追随する程度 鱸三尺以下 | 劈作」鱠」と三尺の鱸のことを述べ、 学者である。その著作のうち用薬須知(享保十一年刊、五巻)はス、キ 若水の高弟松岡玄達は、 奇 | 西南海中多有 > 之」とする。 スズキと訓じ、随の大業志を引いて 「呉都鱸魚鱠八九月霜下時収 鱸魚の記事はない。 本草一家言(未刊、十六巻)・詹々言(寛延三年刊、一巻)等には 軍吉宗によって斯学の最高指導者として江戸に招聘せられたほどの 鱸魚も同じく後漢書を引いて庶物類纂と同内容の事を述べている。 白石の東雅(享保四年成か、二〇巻)も若水と同説のことが多く 薬籠本草(享保十九年、二巻)・ 本草綱目記聞(未刊、 師説を出ることはあまりなかったように思われる。鱸魚につい 食療正要(明和八年刊、四巻)には師に同じく 若水なきあとはその後継者となり、更に将 玄達は草木等については多くの業 「達日和名」思思 四巻)・

ても例外ではない。

越後名寄(丸山玄純、宝曆六年自序、三二巻)

鱸 と鱸を挙げ、当時の物産書もことごとく同説を載せる。^^、+^、+ 世比古| 六七寸成者名||波称| 尺以上須受岐云〇鮬 有」とし、 類については、これを河魚と海魚とに二分し(大和本草の影響)、 江戸の成長名の記述も重要であるが、一般の学者の見ることを得な 魚長僅数寸ト云ハ時珍ノ誤ナリ詳ニ庶物類纂ニ見エタリ」とする。 に、小ナルヲセイゴト云 一尺余ナルヲフツコト云 二巻)にもスズキに鱸魚をあて、図解し、食療上の事を述べたあと れる。たとえば江戸の本草学者栗本丹州の皇和魚譜(天保九年序、 と同じ点に興味が持たれる。玄達の弟子鳥田智庵の両国本草も ほど把握していたか明らかにしないが、成長名の記述が、三才図会 河魚の河鱸と海魚の鱸とに記事がある。河鱸には、 も庶物類纂と同説のことが多いが、鱸魚についても同様である。 かった庶物類纂を参照の上その言説をしている点は興味を引く。 の学者の中にも、若水的見地に同じてスズキ説を取る者が多く見ら 魚体上の記事と成長名とを載せる。鱸魚について問題点をどれ 鱸には「其形大成者二三尺長円小鱗淡灰色三四寸 者称 俗字乎小鱸」と 「大成四五尺余 本草ニ松江鱸 との外 河

相違が見られ、玄泉が徐々に自説を更新していったあとがたどられ 外に未見ながら享保二十一年本があるらしい。それぞれ若干記述に らがいて、本療本草系の著述を持ったことについては既述した。 博士は改訂増補日本博物学年表(昭和九年刊)に述べておられるが 保四年本・同十六年本・元文六年本の三種あることを、白井光太郎 泉はわが国最初の魚類専書たる日東魚譜を著述するが、 に神田玄泉(実名戸田立賢)がいる。玄泉以前に新井玄圭・野必大 来徐々に江戸学派が充実を見せる。その頃の市井の医師・本草学者 松岡玄達が官命によって江戸に下ったのは享保六年のことで、 これには享

からは食物知新が重要なのであろうが、これのみ未見である。文三年序、二巻)の類が著述された®。そのうち日東魚譜との関係を首・四巻)・本草図譜(享保十五年序、六巻カ)・本草或問(元食物知新(享保十一年序、巻首・六巻)・本草大義(享保十四年序食物知新(享保十一年序、巻首・六巻)・本草大義(享保十四年序のらは食物知新が重要なのであろうが、これのみ未見である。

っていない。朱氏談綺のごとき示唆に富んだ書に接しながら、これ 無」異)と事実無根の説を挙げ、 の日東魚譜では鱸魚について鈴好きの略という語源説を述べ、時珍 り、本草大義の自序に、「東方乃魚塩之地也魚塩之医夫治ニ魚塩之 えながら解説するという方法論のもとに著述したのが日東魚譜であ き及ばなかった魚類について、従来の著で採用してきた、図解を加 は食療本草系のものとして著述されたが、それらの書にほとんど説 綱目所載之諸家注解之誤謬也」とその意図を述べている。食物知新 について考証を試みたもので、その凢例に「凢此書乃所以正於本草 翼は同様の事項につき図解を主としたもの。本草或問は若干の事項 類によって範囲を拡大し、ほぼ同様な方法で記述したもの。本草図 博物学的解説を加えたもの。本草補苴は大義著述後参看した府県志 草大義は鉱石・草木について、図解を示し、漢異名・和名を挙げて する所にも至っていない。当時の江戸の市井学者のある姿勢・水準 を十分に消化しえなかった。若水のごとく博覧によって時珍を否定 の「長僅数寸」説を挙げ、朱氏談綺を悪用して「朱舜水曰鱸魚和漢 而不可以謂無瑕矣」とする所に自負のほどを見ることができる。本 本草或問の自序に貝益軒・稲若水・松玄達の名を挙げ、 玄泉の姿勢はまだ医学的であって、博物学的態勢はまだ整 産地に触れ、ついで気味・主治に 元文六年本 一玉則 宝

を示すものと言えよう。

ある。 視し、 くない。 諸島産物図説では動物類にも説き及んでいるが、魚類にはさして強 は遙かに博物学的である。藍水の長子西湖は若干分野が広く、 とする。その門下生は、そのような要請は一方に持ちながら、 に丹州の諸著に限らず以後の各種の著書についても妥当することで したからであろうし、そこに斯学の深まりを感じる。 れば足りると考えたろうのに対し、 魚譜よりも遙かに精緻である。 皇和魚譜・丹州魚譜・丹州魚貝譜等の著がある。いずれも魚図を重 る。将翁・藍水は旧来のごとく草木中心であり、薬学的研究を目的 り自ら小異もあり、専攻分野・学的傾向等を異にするものも を持つとされる®。そういう学派的傾向の中にも、 将翁に始まり田村藍水に引きつがれた江戸学派は実用主義的傾 鱸魚については、 解説は二次的価値を与えられているの感がある。 藍水の次子栗本丹州は動物類の著が多く、 皇和魚譜に若水説を卓説として挙げてある それは日東魚譜がその大体を示唆す これは魚図に博物学的解説を托 個々の学者によ 魚類については このことは単 魚図は日東 生じ

は外に随観写真三十巻・本草綱目会読筌十三巻など関連書があるが 目補とするところに、 載のない物品についてのわが国の諸学者の説を略記したもので、 補物品目録(享保十三年序、二巻)・同後編がある。本草綱目に記 の方に見るべきものがある。同じく監水門の後藤光生には本草綱目 い。その点むしろ彼の弟子でその考証的傾向を発展させた高木春山 キに好都合な記事を選んだ感じで、十分に科学的であるとは言えな 異同に引廻わされ、それらの批判も十分でなく、更には、わがスズ とするもので、定海県志・舜水説・揚延季詩・陏大業志・清一統志 なかったのである。占春斎魚品(文化六年序)は中国書の考証を主 は従来の説を出るものではない。折角の舜水説のヒントを理解でき 異種と考えたアラを挙げる。アラを挙げる所に特色がある。その他 種呼洋鱸者一名海鱸一名安良此似鱸濶口味粗大者至百余斤」と同科 其大者即須受幾也」と成長名を挙げ、次に産地を挙げ、更に 業志を引用し、「小者日世比呉稍大者日不都古此舜水所云紫腮鱸也 で刊行)・占春斎魚品等がある、纂疏では舜水説を引用し、「朱舜 ・海塩県図経・海錯疏・四明謗等を引用するが、それらの記事間の 水云鱸魚和漢無異」とし松魚鱸魚三種の記事を挙げ、玄達同様陏大 朽の書を持ち、魚類に関するものでは本草綱目纂疏十五巻(三巻ま 書の多い学者であり、成形図説百巻・国史草木昆虫攷十三巻など不 三年刊、六巻)には鱸魚の記事はない。曽占春は藍水門では最も著 をかなり高度に消化しえた本草学者であったが、物類品隲 ことは既述した。他の二書には記述がない。平賀鳩溪は西洋生物学 なお光生には本草関係書が多かったが、散佚して多くは所在 なお鱸魚は綱目に載るため、 わが学的水準とその意気込みを知ることがで この両書には載らない。光生に (宝暦十 ! 「有一 細

解によって十分にうかがいうる。 おしている。 る魚図がある。一 段にぬきんでていたことによるものであろう。春山の博物学的知識 体上の特質に関する博物学的知識が、当時の本草学者一般よりも格 しえたのは、彼の漢籍に対する読解力の深さもさることながら(春山 の深さ、精確さは本草図説(巻二一~巻一九七)における精緻な図 の使用する文献の多くは、若水もすでに使用している)、魚類の魚 ゴリに近い小魚なのである。そのようなことを春山が正しく弁別 マンであろうとする®。実はこの四鰓魚は、カジカ科に属し、 珍の鱸は四腮鱸でスズキではなく、皇和魚譜に載せる琵琶湖のダウ て、「松江の鱸魚はことなる名物にていと希なる物なれど」とし、時 の記述とつき合せ、更に事言要言・江南魚鮮品の記事を裏書きにし と無かるべし」と説き始め、寧波府志・三才図会の記事を舜水談綺 魚なるに疑なきなれどまたその同名異物ある事を知ってよに惑ふこ て興味の深いことである。その鱸魚の項に、「須々支はかしこの鱸 るものであったが®その彼が、すべての官医・本草学者が軽卒に看 過してきたことを鋭く見ぬいて堂々たる所論をはいたことはきわめ もしれない。春山は町人の出で、 あり、春山魚譜である。あるいはこの書のみであると言ってよいか (黒点のあるものとないもの)・フッコ・スズキの四種の精緻きわま 中国の鱸魚を真に正しく弁別しえたのは曽占春の弟子高木春山で ひいては中国文献における同名異魚を正しく弁別する基本的 その目が文献の解釈に自ら生き、舜水談綺も正しく理 枚の鱗といえどもおろそかにせぬ精確さで書きと わがスズキについてはセイゴ二種 諸侯の用達を務めるのを家業とす わが

不明である

能力となったのであろう。

草的である じた人で、啓蒙的意味をも含めてこの書を著わした。すずきに鱸魚 魚のシマスーにモフッコを挙げる。気味・主治を附記する点なお本 げるが、松江のスズキを四腮魚にあてる程度の解説である。ただ類 を充て、セイゴ、フッコの江戸の成長名、雲州のチウハンの名を挙 魚鑑(天保二年刊、二巻)の著者武井周作は蘭学を修め本草に通

で、

解と解説とを加えてある。 くし、狩谷掖斎のすすめに従って魚類の写生と研究とに没頭し、そ 図解と解説とを施していく。辰行は神田の菜果商で、幼より絵をよ る。本草的研究という態度はすでになく、全くの博物学的見地から いる。前者には鱸魚の事はないが、後者にはわがスズキについて図 添えた水族四帖(稿本、国立国会図書館蔵、 族写真(安政四年刊、三巻)と、各種の魚類について図解し解説を の写生は精緻をきわめた。その著には鯛類のみについてまとめた水 江戸の市井の魚類学者奥倉辰行ともなると、全く姿勢が違ってく 四巻)などが知られて

蘭山が享保六年に官命によって東下した松岡玄達のあとをうけて、 史的価値が大きい。 念をはさんでいない。008啓蒙は成長名が多いので、その意味での語 魚については安永四年の珍綱解説以来スズキ説を取り、 産物解等の著も多い。最大の著書は本草綱目啓蒙四八巻である。 救荒本草· 本草・物品目録・巻懐食鏡・詩経名物弁解・本草綱目・秘伝花鏡・ 年には東下して医学館で本草を講じることになる。蘭山の説は大和 京都学派の重鎮の地位を占めていた。もっともその蘭山も寛政十一 江戸で藍水門の右の人々が活躍していた少し前に、京都では小野 爾雅等の講義聞書の形で多く残り、採薬記・魚譜・詩経 二山 先 生 鑒定時珍食物本草目訳(東洋文庫蔵) ほとんど疑

> も「鱸魚」とする。蘭山門下および同系の本草学者の説った。 向が強く、諸説の集大成としての功績は大きいが、とくに見るべき べき説がない。桃洞の弟子畔田翠山には著書が多いが、名物学的傾 るべき見解が多い。ただ鱸魚では、魚譜にも本草余纂にも特に見る になりはてた。蘭山門でも古医方派に属する紀州の小原桃洞には見 ちた京都の反官学的気風を全く失い、保守的な・新風に乏しいもの は名物学的傾向へと後退し、その傾向は山本家の代々にもひきつが 中心は山本亡羊で、主著格致類篇一二五巻追加二巻は名物学的著述 記聞・魚譜(小原桃洞)などがそれである。蘭山没後の京都学派の も蘭山の説を出ない。たとえば蒹葭堂補正本草綱目記聞・物部寿斉 かに江戸に移り、新風は絶えず東から吹いてくるようになったので かりである。幕末に近づくにつれ、この部面でも学問の中心は明ら 新見解に乏しい。綱目註疏四八巻・水族志十巻・古名録八五巻等し れ、またそこで育った学者たちの多くは、 水の蘭山を多く出るものでない。いずれにしても亡羊の学問的傾向 若水の庶物類篇に類似する。 鱸魚はスズキ説で、資料的にも若 かっての清新の気風のみ はい ずれ

注 1 志何能、 - 呉都献松江鱸魚、煬帝日、所謂金聲玉鱠、東南之佳味也」(烟花記 「翰入洛、因見秋風起、乃思呉中菰菜蓴羹鱸魚鱠日、 **鞣**官数千里以要名爵乎、遂命駕而帰」(晋書張翰伝)。 人生貴、 得適

ある。

所ヲ取ル、松江ノ名産、 >ノモノヲ上品トス、松江ハ湖水ナリ、冬十月比ヨリ塩海へ出ズ、其 「鱸魚唐ニテハ松江ノモノヲ上品トス、日本ニテハ雲州松江ハマツエ 石田筆記 和漢符合ス、甚奇ナリ」(珍綱解説、安永四

- 北近崑山大江入海所出者三鰓味帯鹹肉稍慢迴不及松江所出2.談苑松江鱸魚長橋南所出者四鰓天生鱠材也味美肉緊切終日色不変橋
- ③ 田中茂穂・原色日本魚類図鑑にはこうある。「スズキ又はススキ(一般の称呼)。東京では小さい時をセエゴ、稍や長じてフッコと云か 大…体色は青味強く、不明瞭な黒褐色の斑点を散在して居る。此色点 は地方によっても、個体によっても相違があって、九州西岸、朝鮮な は地方によっても、個体によっても相違があって、九州西岸、朝鮮な は地方によっても、個体によっても相違があって、九州西岸、朝鮮な は地方によっても、個体によっても相違があって、九州西岸、朝鮮な だに居るものは頗る明瞭且つ大きい。…日本から朝鮮、中華民国へも 分布して居る。体長は一メートル余、体量二貫に達する。主に海のも がであるが、海岸附近に居るもので、利根川などでは潮入の処よりも 盛に上流へ溯ることもある」 また蒲原絵治・原色日本魚類図鑑に で六○cmとなって成熟する。夏特に美味」とある。
- センチ)フッコ (三五センチ、大小の意味がある)スズキ (約五〇セ(五センチ)コッパまたはデキ (一〇センチ)セイゴ・セエゴ (二五新聞社)より引用すれば、次のごとくである。「東京附近ではフッコの成長名について、内田恵太郎・さかな異名抄 (昭和四十一年、朝日5 魚類の成長名は渋沢敬三・日本魚名の研究に精しい。現在のスズキ

- ド(成魚)。山陰ではチウハン・アンザン(三〇センチ内外)。
 ボ(山〇センチ)のネゼ(二五センチ)のカラ(三〇センチ)ススイゴ(二〇センチ)のネゼ(二五センチ)のオオモノとなる。北陸ではメイカ(二〇センチ)のスが、山陽中部ではセイゴ(一〇センチ)の水が、山陽中部ではセイゴ(一〇センチ)の水が、山陽中部ではセイゴ(一〇センチ)の水が、山陽中部ではセイゴ(一〇センチ)の水が、山陽中部ではセイゴ(一〇センチ)の水が、山陽中部ではセンチ)の水が、山陰ではチウハン・アンザン(三〇センチ内外)。
- 6 東南江海四時俱出小者数寸大者三五尺巨口細鱗似鱈而白質黒章頭大路之之下の大脚或有黒点亦間有之川河者味美脂多江海者味浅脂少今鰭硬有四鰓而大開或有黒点亦間有之川河者味美脂多江海者味浅脂少今路で大力が大力
- 雖巨而不脆(寧波府志) 有四腮者皮脆而肉厚名脆鱸有江鱸差小而三尺許リ味次之 第三長三四尺日本ノ鱸魚ト同シ(舜水朱子談綺)一尺許リ味次之 第三長三四尺日本ノ鱸魚ト同シ(舜水朱子談綺)一段 スバキ 松江ノ鱸魚ニ三種アリ第一ハ紫鰓鱸魚腮へアギトンス 鱸魚 スバキ 松江ノ鱸魚ニ三種アリ第一ハ紫鰓鱸魚腮へアギトン

腮味淡又有塘鱸形雖巨而不脆(三才図会)なども朱子談綺に近い。

- 謹按後漢書左慈伝云左滋字元放廬江人也少有神道嘗在司空曹操坐操规其所見之小者而言耳
- 9 これらの本草書の著述年代は国会図書館の白井文庫本による。これ

号之耶

草大義の白井本は改定本なのであろう。 草大義の白井本は改定本なのであろう。 草の序に、「曩者不侫著本草大義若干巻」とあり、また本草図翼の序首の序に、「曩者不侫著本草大義若干巻」とあり、また本草図翼の序

2 引持百百人。 11 明治前日本生物学史第一卷二八二P。

12 同書四四八P。

13

甚腴、 腮味淡、 希なる物なり」閩中海錯疏に、 直に巨口細鱗と書くなれど須々支はしか巨口なる物にはあらず正字通 謂松江鱸魚也といへるにてもその同名異物ある事を知るべしそが中に 整玉 體東南之佳味也、 身有黒点、作鮓最良、隋唐佳話、呉郡献松江鱸鱠、煬帝曰、此所謂金 物ある事を知りてよに惑ふこと無かるべしそは寧波府志に海中四腮鱸 に鱸力吾切音盧、巨口細鱗似鳜、 松江の鱸魚はことなる名物にていと希なる物なれど文人の筆を下すに 鱸魚を巨口細鱗といひたれど巨口細鱗はなほ菜花小鱸の方なりさるは た合へり事言要言に談苑…といひ、江南魚鮮品に有鱸魚巨口細鱗、 而不能といへりこの文を三才図会にとりて、寧波府志鱸魚巨口細鱗 皮緊脆而肉厚呼日脆鱸、 大率実験を務めずして前文を踏襲しゆくが多かれば鱸魚とだに言へば 須々支はかしこにいふ所の鱸魚なるに疑なきなれどまたその同名異 長至二三尺者、又有菜花小鱸、 又有塘鱸形雖巨而不脆といへり舜水談綺に…といへるは大か 続韻府天下之鱸皆両腮、 有四腮者皮脆而肉厚、名脆鱸、 有江鱸、 鱸類鱖 差小而両腮、 長数寸有四腮、 僅長四寸而四腮、 惟松江鱸四腮、とありていと 肉肥味厚而二腮といへるは一 味淡、有塘鱸形雖巨、 俗呼四腮魚、 有江鱸差小而両 産松江蘇子所

呉都…玉鱠といへるはなほスドキなり」本朝食鑑に…といへるは全く が釣りたりといへるは確ならねどこゝのスヾキと見ゆまた陏大業志に はあらず」こゝにいへるスヾキは鱸魚とも言ひまた塘鱸ともいふ左慈 両喩而兼言之といへるを見るべしては皆てゝにいへるス、キのさたに 名土附魚為鱸鯉、 るは似鱸鯉とあるを脱せるなりそは事物異名録に鱸鯉演繁露、呉興人 字苑云似饠而大青色といへるもスドキの上にはあらず又その似鯉とあ ヲコゼは杜父魚なれどその大にしてダウマンにまがふばかりなるは鱈 にその四腮なる脆鱸は口傍にやゝ稜角ありてカワヲコゼに似たりカワ 同類なる事しらる」三才図会にその説く所の脆鱸江鱸塘鱸を図せし中 その自注に魚之食蝦者、本称蝦虎、市者美其名日四腮鱸といへるにて その同類なるハゼをも偽りて鱸と言ひて売れりそは湘南楽府に凇南好 リコレ鳙魚ノ類ニテ尤大ナル者ナリといへる物白質黒章なり」後には テ黒褐色ニシテ細鱗アリ大ナルハ五六寸ニ至ル先輩杜父魚ニ充ツ非ナ は同書チ、カブリ鱅魚条に又琵琶湖ニ一種ダウマント呼ブアリ形相似 にあらず」かくてこの四腮鱸は皇和魚譜一に載せたるダウマンなりそ 時珍日鱸出…東南佳味也とありこの文正しく四腮鱸の方にしてスズキ スヾキも黒章の者あれどさばかりに黒きはなし」しかしてその集解に 色日盧、此魚白質黒章、 といへるにてもとより別物なる事を思ふべし」本草綱目に時珍日、 在在有之、 品を錯記せるにて二腮はスヾキの方なりしかして下文に按鱸江淮広浙 なりそは遯園居土魚品に有鑑巨口細鱗、蘇子所謂状似松江之鱸渚也 人物笑同情、六跪蟹螺通蜗族、四腮蝦虎冒鱸名、不用甚分明とありて に因りて盧に従ひたるなれされはスヾキは鱸の本義にはあらずさるは 、キン崔禹錫食経云鱸<音盧和名須々木>貌似鯉而態大開者也、 呉淞別有一種、円而短小、 肉緊而無刺、類蟹贅といへる物なり」和名鈔十九に鱸ヘス 似其質円而長、黒蠡相似而其鱗斑駁、又似鱸魚、故 故名、淞人名四腮魚といへるを見れば色黒き 巨口細鱗四腮、 淞江呼為四腮 黒

リクサレ安シスドキトモフツコトハマダヒトハナヲレダヒノ如シ 扁ク広クハシ尖ラスロモ小ナリ鱗細ナリ味劣ル全身脆軟ナリスドキヨ 云同大ナル者ヲセクロト云 モフコ大ナル者二尺ニ至形ス、キニ似テ 者背ニ黒点アリ釣ニテトル夏ヲ上トス大三尺斗リ 物品マダカス、キ トナレバ斑薄シ芸州夏河ニ上リテ冬ニ海ニアリ砂小石ニアリ海ニトル テ頭少ク扁シ アイコ藻汐草 セイゴヨリフツコマテ黒斑アリスドキ ニ至ル者黒クシテ形ス、キノ如シ ス、キ居ル 凡テ魚風ヲ忌ムタヾ風ヲ喜ブハスヾキナリ 色多シ腹下平路肉多金光ノ方眶ニ金色少シ腹豊路肉少シ 壱岐海浅処 は江蘇・浙江・江西等が産地となってゐる。我国にも各地に棲んでゐ 白く、鰓蓋が外に現はれて四条の紅黄色の皺膜を有する。…地方誌で …長さは五六寸、体は円味を帯び、頭大きくして骨ばり、褐色で腹が 又はヤマノカミであって、我国のゴリに近い小魚である。本草綱目に キに充てゝあるが、これはカジカ科に属する四鰓魚スヂカギカジカ、 文はなほこれに因りて変じたるなればなほ実物に遠し」: ノ二年三年ヲマタカト云四年ヲスヾキト云物品シナゴス、キノ初生ヲ 下総絹川セイゴスドキ利根川ヨリ上リ来ル大ササケホドアリ甚踊 ^スマススヾキハイツレモ跳テ餌ヲ食フ共ニ蛇ヲ食スヾキハ血ヲアラ キ性強ク之佇ニ水ウゴカザレバ死ス夏ハ黒点見レトモ冬ハ見エス キヲセイト云 7鱸と云ふ。幼魚の体側に黒点があるのでかく呼ばれるのである。] 井坂錦江、東亜物産史の「鱸」に次のように載る。 セイゴ身白身眶下方赤肉アル者形イサキニ似タリ黒点アル者眶金 極めて少ないものであるといふ。猶ほスズキも支那の海産魚で 溯河してかなり上流で取れる。これも鱸と云ひ、又の名を玉 伊勢セイコ大者マダカト云 シマズ七八寸ヨリ尺余 シマズモフツコト云状スヾキニ似 「我囯ではスズ 尾州ニテス

ベルカ和漢三才図会…

に黒点ある者もあれど盧と名に負ふばかりの黒章はあらず本草啓蒙の本草綱目に依傍して記せるにて似鱈の句の外はスドキに切ならず又稱

イゴト云三年ヲマダカト云四年ヲスヾキト云」 キト云濃州ニテハ一年<二寸許>ヲシイノハト云二年<六寸許>ヲセ スヾキト云江戸ニテハ一年ヲセイゴト云二年ヲフツコト云三年ヲスヾ 云一尺二寸許ナルヲマダカト云二尺ニ近キモノヲハネト云二尺以上ヲ マダカヨリ大ナルヲスヾキト云同国桑名ニテハ八寸許ナルヲセイゴト ネト云芸州ニテハ四五寸マデヲセイゴト云一尺五寸ナルヲマダカト云 テハ三四寸ナルヲセイゴト云七寸許ナルヲセイト云一尺許ナルヲコバ ンザシト云水戸ニテハセツパト云一尺ニ過ルモノヲスヾキト云備前 ナルヲコバネト云雲州ニテハ一尺許ナルヲチウハント云伯州ニテハア ヲハクラト云讃州ニテハ六七寸ナルヲセイゴト云或ハセイト云一尺余 リ筑前ニテハ六七寸ナルヲセイゴト云稍大ナルヲハネゼト云一尺内外 スト云何魚ナル事ヲ知ラズ海人ニ問フベシ…」(安永四年、 イゴハ長ゼヌモノナリト云一種ノ魚ニシテ鱸魚ノ小ナルモノナルニ非 ニシテ六七寸許ナルヲセイゴト云セイゴ漢名鱸魚<魚品>ト云一説セ (蘭山先生鑒定時珍食物本草目訳) 「海河ノ二種アリ各大ニナルモノナリ四五尺ニモ至ルアリ又鱸ノ小 ワタヲ蚰腹<クモワタ>ト云(巻懐食鏡記聞)「鱸魚スヾキ_ 「コノ魚大小ノ名諸州各異ナ (本草綱目啓蒙

会費納入についてのお願い

二番神戸大学文学部国語国文学会へ払込み下さい。誌発行の基金になりますから、未納の方は、振替神戸六六二昭和四十二年度より年額六百円に値上げになりました。機関